

博士論文の要約 / Summary of Doctoral Dissertation

氏 名 落合哉人

Name

学位論文題目 「打ちことば」の基盤的研究

Title

全文を公表できない理由 書籍として出版するため。

Reasons why the full text of my dissertation cannot be disclosed on the Internet

書名 (雑誌名)

Name of magazines/journals

出版社名 ひつじ書房

Name of the publishers

発行予定日 2025年2月

Estimated date of issues/publications

本研究は、携帯メール・LINE・対面会話・ネット通話の4つのメディア・モードの談話資料の比較・分析に基づき、日本語環境において、「打ちことば」を「打ちことば」たらしめる言語使用上の基盤があるかどうか、という問題を論じる試みである。以下、全8章のうちの各章について概要を記す。

第1章 本研究の社会的背景と学術的背景

まず、第1章では、本研究の社会的背景と学術的背景について取り上げた。

ふたつの背景のうち、社会的背景については、直近30年ほどの日本社会において、Ⅰ. 音声通話等を中心的に用いる時代→Ⅱ. 携帯メールを中心に用いる時代→Ⅲ. LINEを中心に用いる時代という形で、対人コミュニケーションがなされる場が移り変わってきたことを説明した。このうち、Ⅰは、1999年以前の日本国内における携帯電話・ポケットベル・インターネットの3者の普及過程に関して整理するものであり、2000年代の携帯メールの普及の素地として、売り切り制度の開始及び端末価格の値崩れに伴う携帯電話の爆発的普及や、ポケットベルの普及に伴う「話すように書く」文化の浸透、インターネットの普及があったことを確認した。同様に、Ⅱは、1999年2月のiモード開始から2012年にかけてのiモード系携帯電話の普及過程に関して整理するものであり、定額料金プランの導入等に基づく低料金化と第三世代携帯電話の導入等に基づく多機能化が普及の背後にあったことを示した。さらに、Ⅲは、2012年から2013年にかけて携帯電話を用いたコミュニケーションの中心的な場が、フィーチャーフォン-携帯メールから、スマートフォン-LINEへと交替したことを確認するものであり、近年LINEは他社とのつながり方全般に関して重要な位置を占めるようになっていくことを説明した。

また、学術的背景については、日本語研究において特に上記Ⅱの時代以降、PCやPCと同様の機能を持つ携帯電話等を用いてなされるコミュニケーション(Computer-Mediated Communication(CMC))で交わされることばを「打ちことば」と呼ぶ動きが生じており、ア)「非同期・非対面」であること、イ)自己装いや装飾性の高い要素が多く現れること、ウ)「話すように打つ」文体を持つこと、の3点の特徴を持つこと

が指摘されていることを説明した。一方、英語圏を中心として一定の研究史を持つ CMDA (Computer-Mediated Discourse Analysis) の研究史でも、そのような CMC の一般化は 2000 年代初頭までしばしばなされてきたものの、CMC が「単一の均質なジャンルやコミュニケーションのタイプ」ではないことが明らかになるにつれて、多くの批判も展開されるようになったことに言及した。そして、同様の批判は日本語の「打ちことば」にも当てはまることを指摘した。但し、日本語の CMC については未だその内実が十分にわかっていないことから、本研究では、日本語における複数の CMC の間で「打ちことば」と呼び得る言語使用上の基盤があるのかどうか探ることとし、特に携帯メール・LINE・対面会話・ネット通話の 4 つのメディア・モードの言語使用に着目して、この問題に取り組むことを述べた。

第 2 章 先行研究概観

第 2 章では、本研究に先行する既存の研究について、個々の CMC モードにおける言語使用を記述する研究と、我々の言語生活を取り巻くメディア・モードの特性を分類する研究の、ふたつの観点から概観した。

ふたつの観点のうち、言語使用を記述する研究に関しては、携帯メール・LINE・SMS (Short Messaging Service)・IRC (Internet Relay Chat)・IM (Instant Messaging) の 5 つのモードに着目し、表現・表記・談話構造についてこれまで指摘されてきた内容を整理した。5 つのモードのうち、まず、携帯メールについては、一貫して話しことば的な言語使用がなされることが指摘されてきたことを確認したほか、個々の言語的要素が実際の談話においてどのように用いられているか質的・量的な分析が試みられていることを示した。次に、LINE については、携帯メールを対象とする研究の関心を引き継ぎつつも新たな関心に基づく研究が増えつつあり、コミュニケーション一般の特徴 (例：話題の同時進行が起きる、素早いやりとりと間の空いたやりとりの双方が起きる等) や、「あいづち」「フィルター」「エセ方言」「句点等の記号」といった個別的な表現・表記の特徴の記述が進んでいることを述べた。続いて SMS については、主にヨーロッパの研究の動向を取り上げ、英語、ドイツ語、フランス語、スウェーデン語といった様々な言語で特殊な表記が生じることが報告されていることや、特にイギリス英語において大規模なコーパス構築をもとに言語使用の実態を捉える試みがあること等を取り上げた。さらに IRC については、「宛名性」「言語的省略」「プロソディの再現」「行動及びジェスチャーの再現」といった独自の言語使用が報告されていることや、「乱れた隣接性」(Disrupted Adjacency)により、複数の話題が同時に進行する様子が確認されていることを説明した。最後に、IM については、主にアメリカの研究の動向を取り上げ、SMS や IRC 同様、特殊な表現・表記について分析がなされていることや、ひとつの発話を複数の発信に分けて送る「発話の分割」(Utterance Break)について調査・分析がなされていること、「乱れた隣接性」に対する言語的対処の方略について検討がなされていること等を確認した。

一方で、メディア・モードの特性を分類する研究に関しては、CMC を対象とする研究においてメディア・モードの分類はそれ自体重要な課題であることを述べ、「打ちことば」研究及び CMDA において、個々のメディア・モードの特性がどのように分けられてきたか概観した。先行研究の分類は大きく、主に状況的側面 (例：話題、参加者の属性及び関係性、利用場面) に着目するもの、主に機能的側面 (例：記録性、同時性、編集可能性) に着目するもの、状況的側面と機能的側面の双方に目を配るものの 3 者に分けられることを説明し、それぞれの研究で提示される特性及び、特性の分類の背後にある研究者の意図について説明を行なった。

第3章 対象とするデータ

第3章では、特に機能的側面に着目して携帯メール・LINE・対面会話・ネット通話の特性上の共通点・相違点を整理した上、実際に本研究で検討を行う談話資料について説明を行なった。

まず、メディア・モードの特性に関しては、日本国内において携帯メールとLINEが通信技術の普及過程の上で前身-後継関係にあることから（すなわち、状況的には近い形で用いられてきたことが予測されることから）、両者で明確に違う部分である機能的側面に着目して4つのメディア・モードの特性の共通点と相違点を挙げた。本研究ではメディア・モードの特性として「送受信」「既読表示」「方向性」「密室性」「記録性」「引用の難易度」「発信の固定」「表示形式」「検索性」「匿名性」「参加形態」「共有できる要素の種類」「視覚表現性」「文字数制限」「編集可能性」の15項目を提示し、特に携帯メールとLINEでは、「既読表示」「表示形式」「検索性」「参加形態」「共有できる要素の種類」といった観点で特性に違いがあることを指摘した。

次に、本研究で検討を行う談話資料については、4つのメディア・モードでいずれも若年層東京方言話者の言語使用に着目し、LINEとネット通話については独自に収集した談話資料を、携帯メールと対面会話については既存のデータベース及びコーパスの談話資料を、それぞれ使用することを説明した。各データのうち、携帯メールと、対面会話の談話資料の一部（『名大会話コーパス』(NUCC)及び『BTSJ 日本語話しことばコーパス』(BTSJ)の一部）は2000年代に収集されたものであり、LINE、ネット通話、対面会話の談話資料の一部（『日本語日常会話コーパス（モニター公開版）』(CEJC)及び、BTSJの一部）はいずれも2010年代に収集されたものである。

最後に、特に音声を基調とする対面会話・ネット通話については複数のコーパス・データベースのデータを用いることから、量的分析にあたって、作成方針の異なるトランスクリプトをどのように扱うかが問題になることを指摘した。その上で本研究では、参加者の順番交替が起きてから次に順番交替が起きるまでの、あいづちを除く一連の実質的な発話を1ターンとみなすこととし、その際、実質的な発話であるかあいづちであるかは、①構文的な複雑さ、②そのとき言及がなされている話題が誰に属するものであるか、③当該の発話が他の参加者にどのように対処されたか、④隣接ペアの一部を構成するか、の4つの観点に基づいて判断することを説明した。

第4章 「打ちことば」の基礎的観察と言語量仮説

第4章では、文字を基調とする携帯メールとLINEの談話資料の取り扱いについて検討した上、本研究が扱う携帯メール・LINE・対面会話・ネット通話の談話資料を対象とした第一の量的分析を試みた。

第4章で取り上げた内容のうち、まず、携帯メールとLINEの談話資料の取り扱いについては、LINEにおいてしばしば一度に複数の発信が連続して送られる「発話の分割」が生じる一方、携帯メールでは同様の現象がそれほど生じないことから、同じくCMCである両者の談話において、1発信の言語量としての重みが必ずしも等しくないことを論じた。その上で、特にLINEにおいて「発話の分割」にどのような様式があるか質的に観察し、「(A)単純に複数の発信がなされる例」「(B)一文が複数の発信に分割される例」「(C)言及される話題ごとに発信が分割される例」の3種類の様式があることを分析した。また、それぞれの様式を踏まえると、言語使用の量的観察においては「発話の単位」「役割の単位」「話題の単位」という3つの分析単位を想定できることを指摘し、このうち、音声発話との比較に資する単位は「話題の単位」であることから、本研究では当該の単位を「ターン」として呼び替えることを説明した。

次に、量的分析については、「打ちことば」研究及びCMDAでは従来、しばしばCMC

の言語使用が簡潔であることが論じられてきた一方、量的分析においては上記の3つの単位のうち専ら「発信の単位」が参照されていることを指摘し、「役割の単位」に基づいて携帯メール・LINE・対面会話・ネット通話の1発話（ターン）の長さを比較した。本研究では、書き起こしにおける仮名書きに改めた場合の文字数（≒拍数）をもとに平均的なターンの長さを算出したところ、結果は携帯メール>対面会話>ネット通話>LINEという並びとなり、同じくCMCモードである携帯メールとLINEの間で約2倍の差があることが明らかになった。また、1分刻みのタイムスタンプ（送信）の観察を通して、そのような1ターンの平均的な長さの違いの背後には、「既読表示」の有無と（フォルダ形式かチャット形式かという）「表示形式」の違いがあることを考察した。

さらに、以上のような分析・考察の結果と具体的な語や節、文の使用としての言語使用との関わりを考えた際、LINEでは発話を理解する上で必須ではないものほど優先して用いられなくなる（あるいは反対に、携帯メールでは冗長であるか、複雑な言語使用に基づく表現が展開されやすいこと）を予測し、そのような、ターンを構成する言語量の違いに基づき、命題から遠い言語的要素の出現傾向を説明できるとする仮説を「言語量仮説」と名付けた。その上で、本研究では文から独立して現れる要素である接続詞・感動詞と、文に接続して現れる要素である接続助詞・終助詞の出現傾向を対象に「言語量仮説」を検証することを通して、4つのメディア・モードの言語使用の位置付けを探ることを述べた。

第5章 文から独立して現れる要素に基づく言語量仮説の検証

第5章では、文から独立して現れる言語的要素である、接続詞と感動詞の出現傾向の観察をもとに、携帯メール・LINE・対面会話・ネット通話における言語使用を比較した。

量的調査の結果、まず、全体的な出現頻度の傾向として4つのメディア・モードでは、第4章で提示した言語量仮説と必ずしも対応しない形で、接続詞・感動詞が出現しており、文字を基調とする携帯メール・LINEともに、1ターンの長さの比から予測される値と比べて著しく出現頻度が低いことが明らかになった。また、相関分析の結果、携帯メール・LINEでは、個々の接続詞・感動詞の現れ方に関して共通した傾向があるものの（=強い正の相関が見られるものの）、その傾向は対面会話・ネット通話の話しことばにおける傾向や、先行研究（石黒ら、2009）で調査されている書きことばの傾向とは独立したものであることが見出された。

一方で、接続詞及び感動詞の出現位置をターンの冒頭に限った場合、携帯メールとLINEの間で個々の語の現れ方に違う傾向も確認され、相対的にLINEの方が相手のことばに何らかの反応や応答、ヘッジを示してから自分の発話に移るという発話展開が生じやすいことが示唆された。これを踏まえ、時系列的にモードごとの言語使用の変遷を解釈した場合、LINEでは、携帯メールにおける発話・談話の組み立て方を基本的には維持しつつも、ターンの冒頭の接続詞・感動詞の使い方については、より音声を基調とする会話に近いものになってきているものと捉えられることを論じた。

次に、具体的な個々の用例の分析では、4つのメディア・モードのいずれかにおける頻出語の用例を観察することとし、1) 携帯メール・LINEで対面会話・ネット通話に比べて顕著に出現が少なくなる要素、2) 携帯メール・LINEで対面会話・ネット通話に比べて顕著に出現が多くなる要素、3) 携帯メールとLINEの間、あるいは対面会話とネット通話の間で言語量仮説とは逆行する出現傾向が見られる要素の3つの観点に関して、特に日本語の文法・談話を対象とする先行研究で指摘される用法的側面を踏まえつつ検討を行なった。

3つの観点のうち、1) に関しては対面会話・ネット通話では出現順位が非常に高い

一方、携帯メール・LINE では出現順位が下がる「で」と「だから」について着目し、個々の用例を詳細に観察した。その結果、文字を基調とする携帯メール・LINE においてそれらの要素はいずれも冗長であったり、出現の動機そのものがなかったりする点から、音声を基調とする対面会話・ネット通話に比べて出現頻度が下がることが見出された。一方で、音声発話内部、あるいは文字発話内部では、言語量仮説が当てはまる形で（＝1 ターンの平均文字数と対応する形で）それらの要素が現れていることも指摘した。

続いて2) に関しては、上記のように接続詞全体の出現頻度は携帯メール・LINE で対面会話・ネット通話よりも低いにもかかわらず、そのような傾向と反して寧ろ携帯メール・LINE で出現頻度が高い「というか」と「あと」について着目し、個々の用例を詳しく観察した。その結果、携帯メールとLINE では、送り手が受け手に関して知ることのできる情報が限られることに起因して、自らが述べた内容に自ら情報を付け足していく自己完結的な発話展開が生じやすく、そのことが接続詞・感動詞の出現傾向の特徴の一端を形成していることが示唆された。但し、対面会話とネット通話を比べた際、ネット通話の方が携帯メール・LINE と近い言語使用が生じることにも言及し、携帯メールとLINE で見られる自己完結的な発話展開は、本質的には、共有できる視覚的（あるいは聴覚的）要素が少なくなることに一般に起因する問題であることを考察した。

最後に3) に関しては、携帯メールとLINE を比べた際、LINE の方が、対面会話とネット通話を比較した際、ネット通話の方が、多く見られる「え」の用例について着目し、やはり個々の用例を詳しく観察した。その結果、特にネット通話において用法を問わずこの語が多くなるのは、上述の送り手（話し手）が受け手（聞き手）に関して知ることのできる情報が限られる特徴が、音声発話の間では、ネット通話において相対的に当てはまるためであることが見出された。

以上の調査・分析・考察を踏まえ、「文から独立して現れる要素については言語量仮説が必ずしも当てはまらないこと」と、「携帯メール・LINE（・ネット通話）では、自己完結的な発話展開の存在に関して共通の特徴があること」を結論とした。

第6章 文に接続して現れる要素に基づく言語量仮説の検証

第6章では、文に接続して現れる言語的要素である、接続助詞と終助詞の出現傾向の観察をもとに、携帯メール・LINE・対面会話・ネット通話における言語使用を比較した。

量的調査の結果、まず、全体的な出現頻度の傾向として特に接続助詞については、第5章で調査・分析の結果を示した接続詞及び感動詞と異なり、4つのメディア・モードにおいて1ターンの平均文字数の比から解釈できる形で（すなわち、言語量仮説と対応する形で）出現する傾向が確認された。一方で、終助詞については間投助詞相当のものも含めた場合、携帯メール・LINE で対面会話・LINE と比べて極端に少なくなる様子が見られるものの、主節または引用節末尾の活用語終止形に後接するものに限って観察した場合、4つのメディア・モードで言語量仮説と対応する出現頻度となることが見出された。また、接続助詞と、主節または引用節末尾の活用語終止形に後接する終助詞の双方について相関分析を行なった結果、携帯メール・LINE・対面会話・ネット通話ではいずれも、個々の語の現れ方に関して非常に強い正の相関が見られることが明らかになった。さらに、特に接続助詞について『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)における個々の語の検索ヒット数と比較したところ、4つのメディアモードで共通する接続助詞の出現傾向は書きことばでは当てはまらないことが示唆された。

以上の調査・分析の結果を踏まえ、文に接続して現れる命題から遠い要素は、話しことばと「打ちことば」で近い形で用いられており、個々の文のあり方そのものはメディア・モードを問わず類似の特徴があることを指摘した。また、このような発見と、第5

章における、「文から独立して現れる要素については携帯メール・LINE と対面会話・ネット通話で出現の特徴が異なる」とする発見を踏まえ、「打ちことば」を「打ちことば」たらしめる言語使用上の特徴は、個々の文の単位ではなく、複数の文の提示の仕方にこそあることを考察した。

次に、具体的な個々の用例の分析では、以上のようなメディア・モードを超えた共通性の一方で、例外的な出現傾向の異同が見られる要素について、1) 携帯メール・LINE で対面会話・ネット通話に比べて顕著に出現が少なくなる要素、2) 携帯メール・LINE で対面会話・ネット通話に比べて顕著に出現が多くなる要素、3) 携帯メールと LINE に間で出現傾向に違いが見られる要素の 3 つの観点をもとに検討を行なった。

3 つの観点のうち、1) に関しては、対面会話・ネット通話で非常に多く現れるものの、携帯メール・LINE ではやや出現が少なくなる「けど」と「よね」を取り上げた。このうち「けど」の分析においては、同じく話しことば的文体が用いられる 4 つのメディア・モードでも、同一の文中における 2 回以上の連続使用に関する規範において違いが見られ、特に携帯メール・LINE では、ひとつの文と捉えられる範囲で「けど」は基本的に 1 回のみ用いられる一方、対面会話・ネット通話では 2 回以上用いられる場合も多いことを観察した。また、「よね」に分析においては、専ら確認を担う形式であることから、談話の参加者が知識・認識のすり合わせをこまめに行いながらやりとりを深める談話展開のあり方について、携帯メール・LINE と対面会話・ネット通話で違いがあることを分析した。一方で、同じく知識・認識のすり合わせに関わるとされる「え」の出現傾向（対面会話・ネット通話の間では、ネット通話において頻出する。）と「よね」（対面会話・ネット通話の間では、1 ターンの文字数と対応する形で現れる。）の出現傾向に異なる特徴があることにも触れ、ともに音声を基調とする対面会話とネット通話では、談話の参加者同士の認識・知識が一致している間は類似の言語使用が展開されるものの、知識・認識が合わないときのあり方において、やや異なる言語使用がなされることを考察した。

続いて 2) に関しては、主節が後続しない接続助詞を観察した際、携帯メールで「し」の用例が対面会話・ネット通話と比べて有意に多くなることについて取り上げ、個々の用例について詳しく観察した。特に、主節が後続しない「し」の用例を、先行する要素に対して並列の読みができるものと理由の読みができるものに分けると、その割合においてメディア・モードごとに違いがあることを分析した。また、中でも携帯メール・LINE では、同一ターンで自己の発話に内容を付け足す「し」が多いことを示した。このことから、携帯メール・LINE における主節が後続しない「し」の相対的な増加は、第 5 章で明らかにした、両者における自己完結的な発話展開の特徴から説明できることを論じた。さらに、並列の読みか、理由の読みかという用法間の割合の違いは、並列の読みができるものの方が広い文脈で情報の付け足しを行えることから生じることを考察した。

最後に 3) に関しては、LINE に比べて携帯メールで多く見られる「よ」に着目し、やはり個々の用例を観察した。その結果、同じく CMC モードの間で見られる出現傾向の変動は、そもそも一度の発話で何回「よ」が現れることができるか（=いくつ文があるか）という違いに起因する点で言語量仮説に基づいて説明できる部分があるものの、そのほか、携帯メール・LINE における参加者同士の時間の共有のあり方の違いも出現傾向の変動に関わることを分析した。

以上の調査・分析・考察を踏まえ、「文に接続して現れる要素については言語量仮説が概ね当てはまること」と、したがって、「打ちことば」を「打ちことば」たらしめる言語使用上の特徴は、個々の文の単位ではなく、発話・談話の組み立て方において見出されること」を結論とした。

第7章 「打ちことば」の基盤に対する考察

第4章から第6章までの検討に基づき第7章では、本研究の主眼である「打ちことば」の基盤の有無について総合的な議論を行なった。特にこの章では、a) 言語量仮説の検証結果、b) 「打ちことば」の基盤的特徴、c) 話しことば・書きことばとの類似性から捉えた「打ちことば」の位置付け、d) 「打ちことば」で指摘されてきた個別の表現・表記に関する特徴と本研究の検討の対応、e) 本研究から見出される話しことばの性質、の5つの観点について考察した。

上記のうち、まずa) については第4章から第6章までの各章で明らかになったことを振り返り、携帯メール・LINE・対面会話・ネット通話における1ターンの平均文字数及び、接続詞・感動詞・接続助詞・終助詞の各品詞の出現頻度をそれぞれ改めて図として示した。その上で、本研究の検討の範囲において言語量仮説は、文に接続して現れる要素の全般的な出現頻度をはじめ一部では当てはまるが、文から独立して現れる要素の全般的な出現頻度をはじめ一部では当てはまらないことを結論づけた。但し、すべての品詞において、携帯メールとLINEの間及び対面会話とネット通話の間では少なからず全般的な出現頻度に違いがあった一方、個々の語の現れ方については共通した傾向もあったことから、一度に産出される言語量、文体的特徴、個々の言語的要素の3者の現れ方は必ずしもひとつがその他を予測する関係になく、それぞれ分けて実態を捉える必要があることを考察した。

次に、b) については特に、第5章における「というか」と「あと」の出現傾向や、第6章における主節が後続しない「し」の出現傾向から示唆される、送り手が述べた内容に送り手自らが情報を付け足していく自己完結的な発話展開が「打ちことば」を「打ちことば」たらしめる言語使用上のひとつの特徴として、指摘できることを述べた。但し、そのような発話展開は、従来の話しことばとまったく切り離されたものとは言えず、基本的には時空間の非共有や参加者同士が共有できる情報の減少に、既存の話しことばが適応した結果、成立しているものであることを論じた。また、そのような「既存の言語使用の新たな環境への適応」という観点は、携帯メールとLINEの間で見出される言語使用上の違い（すなわち「打ちことば」内部の多様性）を説明する上でも有効であり、ふたつのCMCモードにおける言語使用上の共通点・相違点は「機能的特性」「モードの利用行動上の好まれやすさ」「個々の言語行動」「個々の言語的要素の具体的な使用」の各側面が連動した結果、成立していることを考察した。

続いてc) については、まず、本研究で観察した携帯メール・LINEの談話資料で見られる言語使用上の特徴が、少なくとも文体的特徴として書きことばとは縁遠いものであることから、先行研究でしばしば挙げられてきた「話しことば・書きことばの中間としてのCMCのことば」という言語観は妥当ではないことを述べた。一方で、専ら間つなぎ的に現れる「で」や感動詞（フィラー）、間投助詞が実際の話しことばと比べて著しく減少することからは、携帯メールとLINEにおいて、情報伝達の上でまったく必要のない冗長な要素の使用は避けられる言語規範があり、これは、書きことばにおける言語規範に基づく可能性があることを考察した。同様に、主節が後続しない接続助詞の減少や、同一文中における「けど」の連続使用が避けられることも、文法的に文を完成させる規範や、「同じ形式を持つ要素の重複を回避する規範として捉えられ、いずれも書きことばと重なることを論じた。このような議論を踏まえ、「打ちことば」は、話しことば・書きことばの連続性の上に位置付けられるというより、話しことばに類する特徴が文体的特徴に、書きことばに類する特徴が言語規範的特徴に、それぞれ対応する形で成立していることを指摘した。

さらに、d) については、本研究で対象とした携帯メール・LINEの談話資料において、一見して送り手が日常的に口に出す言葉遣いであるとは考えられない特殊な表現

(終助詞や助動詞としての「にょ」「かにゅ」「よに」「なり」「まふ」等)が見られたことや、先行研究でもしばしば特殊な言語使用(視覚的要素の使用や母方言ではない方言の使用、ネット集団語の使用等)の存在が指摘されてきたことから、上記 b) c) で指摘するような話しことば・書きことばとの共通性だけでは「打ちことば」は捉えきれないのではないかとする反論が想定されることを取り上げた。しかしながら、そのような表現・表記も、①話しことば的な文体を基調としながら、参加者同士の時空間の共有が緩い点、②典型的な書きことば同様文字を基調としつつも明確に特定の受け手がある点の2点によって可能となる点で、本研究で分析した命題から遠い要素の使用と同様の動機によって生じていることを考察した。

最後に、e) については、本研究の取り組みにおいて以上のように携帯メールと LINE の言語使用の特徴の一端が明らかになった一方、対面会話とネット通話の比較から、話しことばの特徴(及び、内部の多様性)も明らかになったことを確認した。特に、携帯メール・LINE において話題が複数進み得ることは反対に、音声会話において一度に進行する話題がひとつであることを明示する現象でもあり、この点から、個々の語の出現傾向を説明できる部分があることと、ネット通話でも一部、自己完結的な発話展開が観察されることから、話しことばも一様ではないがわかること、の2点について論じた。その上で、本研究のアプローチが「打ちことば」だけでなく、コミュニケーション一般の研究を進める上で有効であることを主張した。

第8章 おわりに

第8章では、本研究のまとめとして、第1章から第7章までの概要を今一度示した上、本研究における学術的貢献と今後の展望について論じた。

第8章で論じた内容のうち特に本研究における学術的貢献については、A) 大規模なデータを対象とした点、B) 「打ちことば」と話しことば・書きことばを比較した点、C) 言語使用の構造に着目した点の3点が想定できることを述べた。このうち A) については、これまで少数のデータをもとに議論が展開されがちであった携帯メール・LINE の研究に対して、本研究では量的に観察することで、我々の言語生活を取り巻く様々なメディア・モードの間において、実際に個々の発信・発話からは見出せない言語使用上の違いがあることを明らかにしたことを貢献として取り上げた。同様に、B) については、これまで多くの言語において CMC で交わされることばと話しことばとの類似性が指摘されつつも、実際の話しことばとの比較はそれほど進んでこなかったことに言及し、本研究がこの点に取り組んだことを貢献として取り上げた。さらに C) については、日本語を対象とする「打ちことば」研究において、個別の表現・表記を超えた単位の構造に目を向ける検討が非常に手薄であったことに触れ、本研究では個々の表現だけでなく、その背後にある言語使用一般の構造(特に携帯メール・LINE で見られる自己完結的な発話構造)に目を向けて分析・考察したことを貢献として取り上げた。

また、今後の展望については、本研究において、a) 話しことばの内部の多様性に関する分析が不十分であることや、b) 対象としたデータにおいて状況的特性(たとえば参加者の母方言や性別、親疎)の統制に不十分なところがあること、c) ログデータを参照する限り完全には「文字を打つとき、どのようなことが起きているのか」わからないこと、の3点を挙げ、これらはいずれも研究をさらに発展させる上で注目される論点であることを述べた。